

第5節 音 楽

第1 本指導実践事例集の活用について

1 作成の基本的な考え方

本指導実践事例集の作成に当たっては、中学校学習指導要領及び同解説音楽編、教育課程編成要領、同指導資料、同評価資料等の趣旨を踏まえ、各学校での音楽科の授業が一層充実するよう、指導法も含めた具体的な資料を示している。

2 取り上げた内容

取り上げた実践事例は次のとおりである。特に今期の学習指導要領の改訂事項のうち、「言語活動の充実」「小中連携の充実」「伝統や文化に関する教育の充実」「道徳教育の充実」に係る内容について取り上げるとともに、音楽科の改善事項である〔共通事項〕「伝統的な歌唱」「創作（旋律づくり）」「鑑賞」についての事例を取り上げた。大まかな各事例を表にすると以下のとおりである。詳細については、各事例の題材名の後に取り上げた趣旨について記載した。それぞれの指導実践事例については、1 題材名、2 題材について、3 題材の目標、4 教材について、5 学習指導要領の指導事項と〔共通事項〕ア・イの関連及び具体的な学習活動、6 題材の評価規準、7 指導と評価の計画、8 実践に当たって、9 評価について、で示している。特に、7 指導と評価の計画には、言語活動の例を□の囲みで示した。また、8 実践に当たっては、指導のポイント、ワークシート等の資料やそれぞれの事例の特出する内容について、解説をした。9 評価については、指導と評価の計画の中から、一例を示して、具体的な評価の手立てについて示した。

事例1 第1学年	小・中学校の連携（系統性）を踏まえた歌唱指導（混声合唱の導入として） 変声期を正しく理解するための事例	
	表現 歌唱 ウ	〔共通事項〕音色 旋律 テクスチャ 調 和音 【言語活動】①②⑥
今の自分に合った声でハーモニーを楽しもう		教材 こげよマイケル
事例2 第1学年	小・中学校の連携（系統性）を踏まえた創作指導 言葉やリズムの特徴を感じ取り、構成を工夫して音楽をつくる事例	
	表現 創作 ア	〔共通事項〕リズム 旋律 【言語活動】⑤⑥
日本語の抑揚を生かした旋律を創ろう		教材 シラミ騒動 「赤とんぼ」「からたちの花」
事例3 第2学年	自己のイメージや思いを伝え合い、他者に共感するなどのコミュニケーションを図る指導の工夫の事例	
	表現 歌唱 ウ	〔共通事項〕旋律 テクスチャ 音色 強弱 和音 【言語活動】①④⑤⑥
声部の役割を理解して表現を工夫しよう		教材 「旅立ちの日に」
事例4 第2学年	音楽の諸要素を知覚・感受し、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わう事例	
	鑑賞 ア	〔共通事項〕旋律 テクスチャ 形式 調 【言語活動】①④⑥
楽曲の形式を理解し、多声音楽の面白さを味わおう		教材 「フーガ ト短調」
事例5 第3学年	我が国の伝統文化に関する指導の事例	
	表現 歌唱イ 鑑賞 ア イ	〔共通事項〕音色 リズム 拍 拍子 間 【言語活動】①⑤⑥
我が国の伝統的な歌唱に親しもう		教材 長唄「勸進帳」
事例6 第3学年	国際理解教育との関連と道徳的な価値との関連を図った事例	
	鑑賞 ア ウ	〔共通事項〕音色 リズム テクスチャ 拍子 間 序破急 和音 【言語活動】①④⑥
我が国や郷土の伝統音楽 諸外国の音楽に親しもう		教材 雅楽「越天楽」

※【言語活動】については、言語活動の充実に関する指導事例集 文部科学省（平成23年7月）の思考力・判断・表現力等の育成と言語活動 イ思考力・判断力・表現力等の育成と言語活動の充実に記載されている項目①～⑥を表記した。

- ① 体験から感じ取ったことを表現する ② 事実を正確に理解し伝達する
- ③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする ④ 情報を分析・評価し、論述する
- ⑤ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する ⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる

3 活用に当たっての配慮事項

本資料の活用に当たって次の点に留意されたい。

- (1) 実践するに当たっては、各学校の実態に応じて、各領域の調和のとれた指導計画の作成と活用を図り、音楽の美しさや喜びを味わうことができるよう学習指導を展開していただきたい。また、「小中学校との連携」「道徳教育」「国際理解教育」等との関連も視野に入れ、生徒の多様な学習活動が展開できるように努めていただきたい。
- (2) 言語活動の充実には、音楽科の目標と指導事項との関連及び生徒の発達の段階や言語能力を踏まえて言語活動を計画的に位置付け、授業の構成や指導の在り方自体を工夫・改善していくことが求められる。音楽科では、創意工夫して音楽表現をする能力や味わって聴く能力を育成する観点から、音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、例えば、表現領域では、どのように音楽表現をしたいのかという思いや意図を言葉で表したり、鑑賞領域では、音楽を聴いて価値などを考え、批評したりする学習活動を充実する。そのため本事例では、指導方法や発問等の工夫を提示した。

第2 実践事例

事例1 (系統性)を踏まえた歌唱指導(混声合唱の導入として)(第1学年)

1 題材名 今の自分に合った声でハーモニーを楽しもう

※第1学年における歌唱の活動では、〔共通事項〕との関連を図りながら声部の役割や全体の響きを感じ取り、表現を工夫しながら合わせて歌う能力を育てることが指導のねらいの一つとなっている。

第1学年は体の成長に伴う声の変化が顕著に見られる時期であり、教材も同声合唱から混声合唱のものに変わってくる。しかし、声の出し方や響きを感じることは小学校で学んできたことが基本となる。

本事例では小学校5・6年 A表現(1)エでの指導内容である「各声部の歌声や全体の響き、伴奏を聴いて、声を合わせて歌うこと」の指導を受け、生徒の発達段階に適した「自分らしい声」を知り響きある声で歌い、またその組み合わせから生まれる中学生としてのハーモニーを感じながら表現することにつなげていく。

2 題材について(省略)

3 題材の目標

- (1) 同声合唱と混声合唱の響きの違いを聴き取り、自分の声に合った発声を工夫しながら、合わせて歌う活動に主体的に取り組む。
- (2) 混声合唱の豊かな響きを感じ取って、どのように合わせて歌うかについて思いや意図をもつ。
- (3) 声部の役割や全体の響きを生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付けて歌う。

4 教材について

- (1) 「Michael, Row The Boat Ashore」(こげよマイケル)

スピリチュアル／編曲 長谷部匡俊(同声合唱) 黒澤吉徳(混声合唱)

- 小・中学校両方の教科書に取り上げられており、I・IV・V度のハーモニーを味わうことができる教材である。

- (2) 「変声期と合唱指導のエッセンス」～授業で聴かせたい変声の様子～CD付 竹内秀男 著

- 本の付随資料として、小5～中3までの一人の男子の歌声を記録した実録CDが添付されており、変声期の声の変化について実際に知ることのできる教材である。

※その他、同じ曲を少年合唱団と成人の合唱団が歌っているものを聴かせたり、一人の歌手で変声前と変声後の両方の歌声が比較できる曲を探し、対比して聴かせることも、変声を具体的に知る上で参考になる。

5 学習指導要領の指導事項と〔共通事項〕ア・イの関連及び具体的な学習活動

指導事項	歌唱ウ 声部の役割や全体の響きを感じ取り、表現を工夫しながら合わせて歌うこと。		
〔共通事項〕ア イ	音色	旋律 調	テクスチャ 和音
具体的な 学習活動	<ul style="list-style-type: none"> ・今の自分にあつた音域を自ら考え理解してパートを選び歌う。(変声期の理解) ・曲にふさわしい響きのある声の出し方を工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽譜に示されているリズムや音の高低を正しく歌う。 ・移動ド唱法を用い、様々な調で歌うことで音程感覚を育てる。(小学校からの指導の系統性) 	<ul style="list-style-type: none"> ・声部の役割と全体とのかかわりを理解し歌う。 ・I・IV・Vの全体の響きと美しさを感じながら歌う。

6 題材の評価規準

	音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
題材の評価規準	①声部の役割や混声合唱の響きなどに関心を持ち、今の自分の声に合った発声を工夫しながら合わせて歌う活動に主体的に取り組もうとしている。	①声部の役割や合唱の豊かな響きを感じ取って音楽表現を工夫し、どのように合わせて歌うかについて、思いや意図をもっている。	①声部の役割や全体の響きを生かし、混声合唱にふさわしい音楽表現をするために必要な、発声や呼吸法などの技能を身に付けて歌っている。
1時	①	①	
2時		①	①

7 指導と評価の計画(2時間)

時	○学習内容	・主な学習活動	○指導上の留意点	☆評価規準と評価方法
	＜第1次＞ 今の自分の声の状態を知り、自分の声にあつたパートを選んで歌おう。			
1	○今まで学んできた発声についての注意点等を意識して歌う。 ・小学校で発声についてどんなことを学んできたか確認しながら発声練習をする。		○小学校で学んだ発声についての注意点等を確認する。 ・自分の歌声及び発音に気を付けて歌うこと。(小1・2年) ・呼吸及び発音の仕方に気を付けて、自然で無理のない歌い方で歌うこと。(小3・4年) ・呼吸及び発音の仕方を工夫して、自然で無理のない、響きのある歌い方で歌うこと。(小5・6年) ○小学校で学習してきた教材を用い、自由に伸び伸びと歌う雰	

・発声法に注意しながら小学校で学んだ教材を歌う。
 ・歌ってみて小学校時との自分の声の違いを感じたことがあったら具体的にどんなことが違って来たかをワークシートに記入し発表する。

○変声期についての正しい知識を理解し、今の自分の声の状態について知る。
 ・「変声期と合唱指導のエッセンス」のCDを聴く。
 ・聴いた後、変声について感じたことをまとめ各自が発表する。

本題材の最初のポイントとなる部分。今の自分の声の状態を意識するきっかけとさせたい。
 (思考力・判断力・表現力等の学習活動の分類:①②⑥)

○自分の声に合った音域を知る。
 ・「こげよマイケル」の旋律部分を、教員と生徒の掛け合いで歌う。(生徒はハレルヤの部分)
 ○自分の今の声の状態を意識し、ハーモニーを楽しむ
 ・小学校で使用している楽譜を用い、旋律以外の二つのパートを歌ってみる。
 ・旋律を含めた3パートから今の自分の声にあった(歌いやすい)音域のパートを選び歌う。
 ・全員で三つのパートを一度合わせて歌ってみる。
 ・クラスを半分に分け、互いに聴き合いながら歌う。

○合わせてみて感じたことを発表する。

困気をつくる。
 ○特に男子は小学校時と同じ高さで歌えるか、意識して歌うよう助言する。
 ○教師から見て変声が始まっている生徒の感想に着目し、全体の前の発表を促す。(関① ワークシート 活動観察)
 ○自分自身の声と比較して聴かせる。
 ○変声期について補足説明し、理解を深められるようにする。
 ☆声の変化について関心をもって聴くことができる。(関① ワークシート 活動観察)

○変声についてはどうしても男声中心になりがちだが、女声の変化についても必ず触れ、体の成長に伴う子どもの声から大人の声への変化を全員で意識できるようにする。

○小学校時に学習している曲なので、楽譜は用いずに歌わせる。
 ○歌い始めの音を変えることで、ハ長調以外の様々な調で歌い、どの調性が歌いやすいかを考えさせる。(技① 活動観察)

○同声三部合唱の楽譜を使い歌う。男女関係なく、どのパートが歌いやすいかを意識させながら歌わせる。
 ○パートを選ぶ際に、自分にあった音域を考え、選ぶ目安となるよう助言する。
 ○選んだパートごとに座席を移動するなど、歌いやすい隊形をつくらせる。
 ○合わせた時にも正しい音程で歌えているかを確認する。
 ○互いに聴き合うことで、I・IV・Vの全体の響きの確認をする。
 ☆自分のパートの役割を理解し、I・IV・Vの全体の響きを感じ取っている。(創① 活動観察)
 ○感じたことを自分の言葉で発表できるようにする。

<第2次> 同声合唱との違いを聴き取り、混声三部合唱の豊かな響きを他の声部との関わりとともに、感じ取って歌おう。

2 ○女声・男声の役割を理解し、混声合唱に取り組む。
 ・各パートについての名称や楽譜の読み方(特にへ音記号)を確認しワークシートへ記入する。
 ・各パートの旋律を知り、どの声部が今の自分に歌いやすいかを確認する。

・各パートのバランスを意識して小グループでのアンサンブルを行う。
 ・各パート3名計9名のグループをつくり、グループごとに練習を行う。

○グループごとによる発表を聴き、声の重なりから生まれる和声の響きを感じる。
 ・女子のみのグループ、男子のみのグループを続けて行い、男女の声の音色の違いを聴く。
 ・各グループを聴いて感じたことをワークシートにまとめる。

○混声三部合唱の響きを感じて歌う。
 ・混声合唱をおこなう際の各パートの役割について知る。

・全員で歌い、クラス合唱の響きを味わう。

・歌ってみての感想(小学校での合唱との違い等)をまとめ発表する。
 ※男子の低い声が全体の響きの中でどんな役割をするのか。どう歌っていくことが大切なのかを考え発言するようにする。
 (思考力・判断力・表現力等の学習活動の分類:①②⑥)

○混声合唱曲への取組
 ・平易な混声合唱曲に取り組む。

○混声三部の楽譜を使う。変声前の男子については特に男声パートを歌うことにこだわらず、今の自分が歌いやすいパートを歌うよう助言する。またグループをつくる際は混声にこだわらず、比較のために男女別など様々な形態を作る。但し楽譜は混声のものを用い、女声のみのグループは男声パートを1オクターブ上げて歌うなど、各グループごとに歌うパートの工夫をするよう助言する。

○男子の声については変声の有無を確認し、特に男女混合の班では変声後の男子をあてるようにする。

○男女混合グループの発表では、特に男子の声に注目し女子のみのグループと比較して響きはどう違うかを意識して聴くようにする。

☆同じ楽曲でも、違う音色で重なり合うことにより生まれる音の響きの違いを感じ取っている。(関① ワークシート 活動観察)

○混声合唱をする際の各パートの役割について話をし、同声合唱との違いを理解させる。(特に男声パートについて、全体の響きという点から話をする。)

○混声合唱の導入として、特に男子でまだ変声していない生徒について、その音域を確認し男女どちらのパートで歌うことが最もふさわしいか考えさせアドバイスする。(声の状態だけで分けるのではなく、精神面での配慮も必要)

○女子についても特にアルトパートの重要性や難しさを話す。

☆しっかりとした発声をもとに、男女のパートの重なりから生まれる、混声合唱の響きの美しさを感じながら歌っている。(技 活動観察)

○教師の助言をもとに、混声合唱へのこれからの前向きな取組ができるような発言を特に取り上げる。
 ○教材は特に男声パートがあまり低い音域にならない曲を用意する。

8 実践に当たって

(1) 小中の連携について

生徒は、小学校で様々な歌唱の経験をしており、中学校での学習は、小学校での学習が基本となっている。当然、発声や階名唱についても小学校で学んできたことを生かすべきである。そのためにも、生徒が小学校でどのような教材で何を学んできたかを把握しておくことが必要である。使用する教科書にも小中共通の教材も示されており、小学校で学んだことをどう発展的に授業の中で展開していくかは、「学習内容の連続性」という視点で大切なことである。

また、中学校の教師が、小学校で音楽の授業を行ったり、小中学生が、互いの歌声を聴き合うような場を設定するなど学習の交流を視点として工夫を図ることも必要である。

(2) 変声期の指導について

中学校時代は、いわゆる思春期とほぼ重なり、心と体が大きく変化していく時期である。そのため音楽科の授業においてもその歌声は子どもの声から大人の声へと大きく変化していく変声期を迎える。しかし、だからといって歌唱ができない訳ではない。この時期は歌える音域など、今の自分の声の状態を正しく知ることが大切である。この時期の正しい発声指導が、重要となる。

ここでは、小学校高学年から中学校第1学年の声が最も不安定になる時期に当たって、まずは、発声についての正しい知識を録音資料等を用いて、客観的に知るところを混声合唱導入のスタートとする。そして学んだことを基に“自分の声探し”をすすめていく。そのために、発達の段階に応じた歌唱の指導を小学校で学んだことを基本に据え、自分自身の声を正しく知り、より豊かな表現のハーモニーを創り出すことに焦点を当てていく。そのために教材は、小中両方の教科書に掲載されている「Michael, Row The Boat Ashore」(こげよマイケル)を用いた。同じ曲が成長に伴う声の変化によりその響きがどう変わるかも感じ取らせたい。その際、この教材についてや歌唱について、生徒が、小学校で、どのようなことを学んできたかについて確認しておくことは、学習を円滑に進めていく上で、必要なことである。

指導の準備として、生徒の発達の段階を踏まえ、1学年の最初に行う歌唱の指導を通して生徒の個々の状態(変声の有無や声質等)を教師が把握しておくことは、指導を行う過程において役立つ。そのために、生徒一人一人の声の変化について「声のカルテ」をつくり、生徒自身にも普段の授業を通して、自分自身の声が、どのような状態なのかを把握させることを大切に指導した。

(3) 言語活動との関連

本題材では、合唱というコミュニケーションを通して、その響きの美しさや豊かさを感じ合うことが大切である。体の成長に伴う声の変化から生まれる混声合唱の響きが、小学校の同声合唱とどう違うかを言葉で表すことで、これから取り組んでいく混声合唱で求めていくことを確認していけるようにしたい。

また、合唱の練習においては、パートでの練習も重要である。生徒主体の取組では、例えば、パートリーダーが、練習で、パートの仲間を感じたことを、言葉で伝えることが大切である。相手に伝えるためにコミュニケーション能力を身に付けることが必要である。具体的には、〔共通事項〕や音楽用語、記号などについて曲想を正しく使える力が大切である。

その他にも日本語の歌詞からのイメージをどう伝えるか等、合唱の取組の中では、言語活動の充実が重要である。

9 評価について

○しっかりとした発声をもとにした男女のパートの重なりから生まれる、混声合唱の響きの美しさを感じて歌うことができているかを確認する場面

(1) 評価方法及び「おおむね満足できる」状況 (B) と判断するポイント

ア 音の重なりを感じた発言に注目して

同声合唱とは違った混声合唱の響きを感じながら歌っている。(具体的な違いを言葉で表現することができる。)

(2) 「十分満足できる」状況 (A) の例 (アイ両方ができてA)

イ 声に合った発声

自分の今の声の状態を正しく理解し、声に合った発声に留意して歌うことができる。

ウ 男女のパートとの融合性

男女のパートそれぞれを互いに聴き合い、自分の音との重なり(和声の響き)を感じながら歌っている。

(3) 努力を要する生徒への指導の手だて

- ・声の不安定さが見られる生徒の場合は、正確に歌える生徒と一緒に歌うことで安心感を与える。
- ・同声合唱と混声合唱の響きの違いは何か、生徒がしっかり意識できるような助言をする。
- ・常に3パートで合わせるのではなく、2パートずつ合わせることで、合唱の楽しさを感じさせる。



Michael, Row The Boat Ashore () 三部合唱

○他のグループの響きを聴いて感じたことを書いてみよう。
(特に小学生の時との違いについて記入する。)

声のカルテ

1年()

○第1回 声の診断テスト(校歌)の結果 (4/)

※変声の有無など今の声の状態を教師が記入する。

○歌ってみて小学校の時と違うことがあったら書いてみよう。

※声が出ずらくなった・・・等

○今出せる声の音域は(~) ※教員の助言

※声の診断テストを定期的に行い記入する。

事例2 小・中学校の連携（系統性）を踏まえた創作指導（第1学年）

1 日本語の抑揚を生かした旋律をつくらう

※本事例は、創作することがねらいであるが、学習内容や展開に次のような工夫をした。まず、小学校の音楽科における「音楽づくり」の学習経験を生かし、リコーダーでの階名しりとり創作を導入で取り入れた。また、創作の素材が日常の身近なところにあるという例を取り上げたり、山田耕筰の歌曲が、言葉の抑揚をそのまま音の高低に表した曲であることを確認しながら創作に生かしたりする。なお、階名を生かしたアルトリコーダーの教材は、教師が創作したものである。

2 題材について（省略）

3 題材の目標

- (1) 言葉やリズムの特徴を感じ取り、旋律をつくることに主体的に取り組む。
- (2) 表現したいイメージをもち、構成を工夫して旋律をつくるための思いや意図をもつ。
- (3) イメージに合った音楽をつくるために必要な技能を身に付け、見通しをもって旋律をつくる。

4 教材について

階名を言葉とし、音とするユニークな発想から生まれたさだまさしの作品は、親しみやすく、創作のきっかけが日常の中にあるという例である。アルトリコーダーの指使い指導の導入で使用した「ソファーに座ろう」「シラけたラシイ」は、創作を身近なものと感じさせるのに適している。さらに、1学年の教科書で取り上げている「赤とんぼ」は、日本語のイントネーションを意識して曲づくりをした山田耕筰の代表作である。「芸術に恋して」では、よりわかりやすい「からたちの花」を取り上げて説明している。これらは、より創作するイメージがもてるような教材であると考え、選択した。

- (1) さだまさしの作品
- (2) 「ソファーに座ろう」「シラけたラシイ」（わらべ唄風）
- (3) 山田耕筰作曲「赤とんぼ」「からたちの花」
- (4) ビデオ「芸術に恋して」（平成16年放送）

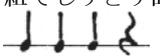
5 学習指導要領の指導事項と〔共通事項〕ア・イの関連及び具体的な学習活動

指導事項	創作ア 言葉や音階などの特徴を感じ取り、表現を工夫して簡単な旋律をつくること。	
〔共通事項〕ア イ	リズム	旋律
具体的な学習活動	・簡単なリズムでしりとり曲づくり ・七五調で歌詞づくり	・歌詞に階名の入った曲を鑑賞したり、演奏したりする。

6 題材の評価規準

	音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
題材の評価規準	①創作に当たり、言葉の抑揚やリズムに関心をもち、音楽表現を工夫して簡単な旋律をつくる学習に主体的に取り組もうとしている。	①楽器を演奏しながら音楽を形づくっている要素（リズム、構成など）を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受けている。 ②表現したいイメージをもち、言葉やリズムの特徴を感じ取って、どのように旋律をつくるか思いや意図をもっている。	①イメージに合う音楽をつくり出すため、必要な技能を身に付けて簡単な旋律をつくっている。
1時		①	
2時	①	①	
3時		②	①

7 指導と評価の計画（全3時間）

時	○学習内容 ・主な学習活動	○指導上の留意点 ☆評価規準と評価方法
＜第1次＞言葉や音階などの特徴を感じ取り、表現を工夫して簡単な旋律をつくらう。		
1	<p>○音階などの特徴を感じ取り、旋律づくりをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アルトリコーダーで、習った指使いの音を使い、4人1組でしりとり曲づくりをする。 <p style="text-align: center;">  の形で4小節。（アルトリコーダー導入の際、既習した内容） </p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>グループで、しり通りの順を決めたり、工夫する点を話し合う。 （思考力・判断力・表現力等の学習活動の分類 ⑤）</p> </div> <p>○言葉と音の高低などの特徴を感じ取る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・さだまさしの作品を鑑賞する。 ・曲ができるまでのいきさつを知る。 ・階名を使って、自分だったらどんな言葉を使えるかを考える。 	<p>○ド、レ、ミ、ファ、ソでもよいが、ラ、シ、ドまで使える生徒は使うよう指示する。ただし、終わった感じ、続く感じの確認をし、曲としてまとまりのあるものを目指すよう導く。</p> <p>☆楽器を演奏しながら音楽を形づくっている要素（リズム、旋律など）を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受けている。（創① 活動観察 ワークシート）</p> <p>○曲作りのきっかけの面白さに注目し、創作を身近なものにさせる。</p> <p>○階名が歌詞であることを知覚させ、ボサノバ風の特徴を生かした曲調であることを感じ取らせる。</p>
＜第2次＞表現したいイメージをもち、音素材の特徴を感じ取って演奏したり、反復、変化、対照などの構成を工夫して簡単な旋律をつくらう。		
2	<p>○教師が創作した簡単な旋律を、歌とアルトリコーダーで演奏する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ソファーに座ろう」「シラけたラシイ」といった、歌詞に階名の入った曲の教材を、リズムや音の高低に注意し、歌とアルトリコーダーによって演奏する。 	<p>○階名を使った教材であるからこそ、言葉の抑揚と音の高低の結び付きが分かりやすいことを理解させる。特に「シラけたラシイ」はわらべ唄の要素があることに触れる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>発問：この曲に似ている曲はないかな？ （階名のシとラを使うとわらべ唄風になり、音の数が少なくても曲らしくなることをヒントとして与え、後の曲づくりに参考にさせる。）</p> </div>

<p>○言葉の抑揚やリズムの特徴を生かして、歌詞をつくる。 <創作〈1〉> ・七五調で1～2フレーズ程度の簡単な(短い)歌詞づくりをする。</p> <p>3 ○表現したいイメージをもち、構成を工夫しながら旋律をつくる。 ・「赤とんぼ」「からたちの花」など、山田耕筰作曲の歌について、言葉の抑揚と音の高低が一致していることをビデオ鑑賞により、再認識する。 <創作〈2〉> ・歌詞に簡単な旋律を付ける。第2時で作った歌詞とリズムに、音を当てはめる。 ・音探しのための楽器として、リコーダー、キーボード、シロフォン、マリンバ、ヴィブラフォン等を利用する。 ・互いに作品を発表する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>・作品発表の際、工夫した点を述べる。 (思考力・判断力・表現力等の学習活動の分類 ⑥) (例) ・特徴的なリズムを印象付けたいので、反復を利用した。 ・寂しい雰囲気を出したいので、わらべ唄風にした。 ・音の高低を意識しながらもヤマをつくった。</p> </div>	<p>☆楽器を演奏しながら音楽を形づくっている要素(リズムや旋律など)を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じている。(創① 活動観察)</p> <p>○「赤とんぼ」の歌詞程度の長さで考えさせる。 ○歌詞と言葉の抑揚(上がり下がり)を  で表す)、リズムを書くことを指示する。(参考:ワークシート) ☆言葉の抑揚やリズムに関心をもち、音楽表現を工夫して創作に主体的に取り組もうとしている。(関① 活動観察 ワークシート)</p> <p>○現代のヒット曲で、この理論に当てはまっているものが多いことから、耳に残りやすいメロディは、「言葉の抑揚と音の高低が一致していることが多い」ということを理解させる。</p> <p>○記譜の方法は、五線譜に限らず、イメージ譜、カタカナ階名譜等、工夫させる。</p> <p>○机間指導等で、参考になる作品をピックアップし、発表させる。 ☆表現したいイメージをもち、言葉やリズムの特徴を感じ取って、どのように音楽をつくるか思いや意図をもっている。(創② 活動観察 ワークシート・楽譜) ☆イメージに合う音楽をつくり出すため、必要な技能を身に付けて簡単な旋律をつくっている。(技① 活動観察 ワークシート・作品)</p>
---	--

8 実践に当たって

- (1) 「旋律創作」というと、難しいイメージをもつので、日頃の音楽活動の中で、さまざまなことに触れ、体験させておくことで、創作活動に入りやすくする。
 ア アルトリコーダーの導入で、階名と音の高低について触れている。
 イ 日本語は音の高低による抑揚が明確な言語であることから、「箸」と「橋」、「雨」と「鉛」など、身近な言葉の例をあげさせておく。
- (2) 第1時で行う学習活動のうち、アルトリコーダーで旋律のしりとりをするのは、アルトリコーダー導入の時期にやってもよいとする。
- (3) 「歌詞」に関しては、発達段階や個人差に配慮し、あらかじめ用意したものを使用するか、自分で歌詞からつくるかを、選択させる。曲のイメージを明確にもたせるためにも、簡単なものでよいので、できるだけ自分でつくらせるようにしたい。
 ※ 歌詞の例
 ア 青いお空に／ポッカリと／綿アメみたいな／白い雲
 イ 真夏の太陽／青い海／みんな笑顔が／まぶしいな
 ウ 夕暮れどきに／カラス鳴き／お寺の鐘が／またひとつ
 エ 秋の夜長に／鈴虫が／見上げる月は／まん丸だ
- (4) 言語活動との関連について、第2時の歌詞づくりにおいて「七五調」であることは、制約というよりむしろリズム感よくつくるためのヒントとなる条件として提示する。生徒がどのように言葉を選び、魅力ある歌詞がつけられるか、生徒の力を引き出したい。また、導入のグループ活動で行うアルトリコーダーによる「しりとり曲づくり」でも、曲としてまとまりのあるものにするための意見交換を活発にすることにより、音楽に主体的に関わる態度を身に付けることにつながると思われる。
 なお、最後に作品を発表する際、工夫した点を含めてその過程を説明することは、自分の意見に根拠をもつことが要求される。そのことにより、音楽的な知識の理解を深め、作曲家の意図を知ることにもつながる。やがては合唱曲などの解釈することに役立ち、表現の技能を高めることになると考える。

※ イの歌詞を使った創作例

歌詞	ま	な	つ	の	た	い	よ	う
抑揚								
音	ミ	ミ	ミ	ファ	ラ	ソ	ソ	ミ
歌詞	(休み)	あ	お	い	う	ー	み	ー
抑揚								
音		ファ	ファ	レ	ラ	ー	ソ	ー

事例3 自己のイメージや思いを伝え合い、他者に共感するなどのコミュニケーションを図る指導の工夫の事例（第2学年）

1 題材名 声部の役割を理解して表現を工夫しよう

※本事例は、「旅立ちの日に」（小嶋登作詞／坂本浩美作曲／松井孝夫編曲）を教材とした歌唱の題材である。学習指導要領の内容は「A表現」（1）歌唱の事項ウを扱う。

生徒が自己のイメージや思いを伝え合ったり、他者の意図に共感したりできるようにするなどコミュニケーションを図る指導を工夫する活動を通して、それぞれの旋律を学習する活動を行っていきながら、声部の役割と全体の響きとの関わりを理解し、工夫して表現する能力を高める。

2 題材について（省略）

3 題材の目標

- （1）声部の役割と全体の響きとの関わりに関心を持ち、音楽表現を工夫しながら合わせて歌う学習に主体的に取り組む。
- （2）音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、声部の役割と全体の響きとの関わりを理解して音楽表現を工夫する。
- （3）声部の役割と全体の響きとの関わりを生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付けて歌う。

4 教材について

「旅立ちの日に」 小嶋 登 作詞 / 坂本 浩美 作曲 / 松井 孝夫 編曲

本教材は斉唱で始まり、声部が一つずつ増えていき、最終的に三部合唱となる。声部が増えていくことによって生まれる和声感を生徒たちに感じ取らせ、声部の役割と全体の響きの豊かさを味わいながら音楽表現を工夫する力を高めていきたい。

5 学習指導要領の指導事項と〔共通事項〕ア・イの関連及び具体的な学習活動

指導事項	歌唱ウ 声部の役割と全体の響きとの関わりを理解して、表現を工夫しながら合わせて歌うこと。	
〔共通事項〕ア	旋律・テクスチャ	音色・強弱
イ	和音	
具体的な学習活動	<ul style="list-style-type: none"> ・本教材の声部の役割を理解する。 ・声部の役割と全体の響きとの関わりを理解して、工夫して表現する。 ・伴奏の響きを感じ取り、工夫して表現する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・歌詞の内容と伴奏の響きを感じ取り、曲想にあった発声を工夫する。 ・声部の役割と全体の響きとの関わりを生かすため、強弱を工夫する。

6 題材の評価規準

	音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
題材の評価規準	①声部の役割と全体の響きとの関わりに関心を持ち、音楽表現を工夫しながら合わせて歌う学習に主体的に取り組もうとしている。	①音楽を形づくっている、音色、旋律、テクスチャ、強弱を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じている。 ②声部の役割と全体の響きとの関わりを理解して音楽表現を工夫し、どのように合わせて歌うかについて思いや意図をもっている。	①声部の役割と全体の響きとの関わりを理解して、音楽表現をするために必要な技能を身に付けて歌っている。
1時	①		
2時		①	
3時		②	①

7 指導と評価の計画（全3時間）

時	○学習内容 ・主な学習活動	○指導上の留意点 ☆評価規準と評価方法
1	<ul style="list-style-type: none"> ○各声部の旋律を聞き取り、旋律の役割を感じながら表現の工夫をする。 ・「白い光の中に～ふり返ることせず」までのソプラノの旋律を全員で歌う。 ・「限りなく青い空に～ふり返ることせず」の男声の旋律を全員で歌う。その後、全員で二部合唱する。 ・「自由をかける鳥よ ふり返ることせず」のアルトの旋律を女声で歌う。その後、女声で二部合唱する。 ・「白い光の中に～ふり返ることせず」までを全員で合唱する。 ・「勇気を翼に～夢をたくして」の旋律をパートに分かれて確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○次のことに留意して全体で歌わせる。 <ul style="list-style-type: none"> ・言葉の響きや発音を意識させる。 ・伸ばす音符や休符の扱いに留意させる。 ・声部すべてが旋律であることを理解させる。 ○主旋律を明確にとらえさせ、主旋律と副旋律の役割について意見交換をさせる。 ☆声部の役割を感じとり、表現を工夫することに意欲的に取り組んでいる。（関① 活動観察） ○正確な音やリズムで歌わせる。 <ul style="list-style-type: none"> ・リズムが合わない場合は「リズム打ち」や「歌詞唱」などの活動を行う。

- ・全員で1番を三部合唱する。
- 2 ○各声部の旋律を聞き取り、旋律の役割を感じながら表現の工夫をする。
 - ・「いま、別れの時～このひろい大空に」までの各声部の音をパート練習で確認する。
 - ・「いま、別れの時～このひろい大空に」までを女声で二部合唱する。
 - ・上記の部分をソプラノー男声、アルトー男声で二部合唱する。
 - ・上記の部分を三部合唱する。
- ・全員で三部合唱する。
- 3 ○各声部の役割を理解し、工夫して表現する。
 - ・AとBの楽譜から、女声と男声の旋律の重なり方の違いを考え、ワークシートに記入する。

- 正確な音やリズムで歌わせる。
- 声部が重なることで生まれる和声感や雰囲気を感じ取らせる。
- 各声部の役割について、意見交換をさせる。
- ☆声部の役割と全体の響きのかかわりに関心を持ち、そこから生まれる和声感や雰囲気を感じている。
- (創① 活動観察)
- 録音をして、曲想に合った表現を工夫する次時の学習の資料とする。
- A、Bの各部分について「①女声の役割と男声の役割の違い」「②その役割を果たすために、どのように工夫すればよいか」を考えさせ記入させる。
- ☆声部の役割や全体の響きとの関わりを理解して音楽表現を工夫し、合わせて歌おうとする思いや意図をもっている。(創② ワークシート 活動観察)

・前時に録音した歌唱を聴き、各部分の響きの違いを確認し、意見交換する。

発問 「AとBの男声の旋律の動きの違いは何か？」
答え 「Aは一緒に動いているけれど、Bは女声と男声がずれていて追いかけてこしているみたいです。」
発問 「それではAとBの男声の役割は何か？」
答え 「Aは主旋律を支えていて、Bは男声で独立しているのだと思います。」
発問 「歌い方の工夫は？」
答え 「Aは主旋律を消さないように、ソプラノを意識しながら歌う必要があります。Bは主旋律を意識するけれども、フォルテで堂々と歌うと合唱全体に躍動感が生まれると思います。」
発問 「それでは楽譜を見ながら、Bのところの歌い方を具体的に考えてみよう。」
答え 「『いま、別れの時』の『いま』の8分音符をアクセントを付けて、一音一音はっきりと歌うと力強い雰囲気になると思います。」

- 「楽譜を見て感じたこと」と「録音を聞いて感じたこと」を発表させる。
- 実物投影機を使用し、ワークシートを画面に映しながら意見を発表させる。
- 各声部の役割と全体の響きの関わりを理解し、積極的に自分の考えを発表させる。

○楽譜を見ながらこの曲の声部の役割を考え、それぞれの意見を発表しながら、各声部にふさわしい表現をまとめる活動。

○思考力・判断力・表現力等の学習活動の分類：
 ④、⑤、⑥

- ・全体の響きとの関わりを生かすための歌唱をパート練習で高める。
- ・全体で合唱する。
- 声部の役割と伴奏を含めた全体の響きを理解し表現を工夫する。
- ・前奏の部分とCの部分の伴奏が意味しているものを考え、ワークシートに記入させる。

- ☆全体の響きとの関わりを意識した発声法で表現することができているか。(技① 活動観察)
- 本時で学習したことを意識して歌わせる。
- この曲が生まれた背景なども説明し、歌詞の内容を考えさせながら記入させる。
- それぞれの部分をピアノで演奏し、生徒に考えさせる。

C



・それぞれの場面が意図しているイメージを意見交換する。

発問 「Cの部分は何を意味していますか？」

答え 「思い出をふり返る、ゆっくりとした速度の前半部分から、これからの生活を表した、速度が速くなる後半部分への転換だと思えます。」

発問 「Bはどのような表現の工夫が適しているかな？」

答え 「力強い和音の伴奏を感じながら、前向きな歌詞をイメージして声量豊かに歌ったほうがよいと思います。」

・全員で合唱する。

○強弱の変化も考えさせる。

☆伴奏を含めた声部の役割を理解し、全体の響きが豊かになるための歌唱について思いや意図をもっている。

(創② ワークシート観察)

○実物投影機を使用し、ワークシートを画面に映しながら意見を発表させる。

○「なぜそう感じたのか」ということを中心に発表させる。

○伴奏の雰囲気を感じさせ、それぞれの意見を発表しながら表現の工夫を考えさせる。

○思考力・判断力・表現力の学習活動の分類：

①、⑤、⑥

○今までの学習を生かして歌わせる。

8 実践に当たって

(1) 「声部の役割と全体の響きとの関わりを理解する」指導について

ア 教材の選択について

本題材では、「冒頭は斉唱で始まるが、その後、声部が一つずつ増えて発展していく構成となっており、各声部を学習しながらそれぞれの役割を理解することができること」「曲全体が短く、各旋律を学習することが比較的容易であること」から本教材を選択した。「声部の役割や全体の響きを感じ取る」ことから、「声部と全体の響きとの関わりを理解して、表現を工夫すること」につなげられる教材を選択したい。

イ 各声部の学習について

本題材では、各声部の旋律を学習する際「全体で音取りをする」方法を中心に行った。自分の声部を学習するだけでなく他の声部を知ることは声部の役割をとらえるためには役立つと考え、本題材の前半部分は「全体で音取りをする」ことを意図的に行った。そのことにより、曲全体の響きを感じ取りながら音取りを進めることができる。本教材より難易度が高い曲を学習する場合は、パート練習により各声部を学習する必要があると考えられるが、その場合は約束事が作られている方が学習効果は高まる。「①旋律と合わせて歌う②伴奏と合わせて歌う③アカペラで歌う④他の旋律と合わせながら歌う」というように四つのパターンを教師が指示しながら、生徒達主体でパート練習させる例もある。また、「音取り」だけでなく、本題材の第3時のように、全体の話合いから生まれた目標を習得するためにパートリーダーを中心として活動するパート練習を行う例もある。

(2) 言語活動との関連

本題材では、音によるコミュニケーションの充実を図るために、音楽に対するイメージ、思い、意図などを相互に伝え合う活動を位置付けて、仲間とともに創意工夫して音楽を表現する喜びを味わうことを中心として授業を展開した。音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら「どのように音楽表現をしたいのか」という思いや意図を具体的に言葉で説明できるようにするために、段階的に声部の役割を各自で考えさせ、それを伝え合う場面を複数回設定した。その活動を通して、仲間と音楽をつくっていく喜びを感じさせたい。

9 評価について

○第3時の楽譜を見ながら「各声部の役割」「役割を果たすための工夫」をワークシートにまとめる場面

(創② ワークシート 活動観察)

(1) 評価方法及び「おおむね満足できる」状況 (B) と判断するポイント

・「各声部の役割」を理解し、「役割を果たすための工夫」や自分なりの思いや意図を書いている。

(2) 「十分満足できる」状況 (A) の例

・右の図のように「各声部の役割」を理解し、「役割を果たすための工夫」について、全体の響きをふまえながら、強弱等を用い根拠をもって具体的に説明している。

	役 割	役割を果たすための工夫
男 声	低音を担当し、全体の響きを支えている。	全体の響きを支えているが、大きく歌いすぎると主旋律を消してしまうため、ソプラノをよく聴いて歌う必要がある。

(3) 指導の手立て工夫例

・「ソプラノがなかったら音楽として成立するか」「男声が目立ってしまったら全体の響きはどうなるのか」などの具体的な例を個別に考えさせ、各声部の役割を理解させる。

事例4 音楽の諸要素を知覚・感受し、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わう事例（第2学年）

1 題材名 楽曲の形式を理解し、多声音楽の面白さを味わおう

※ 本事例は、「フーガ ト短調」（J. S. バッハ作曲）を教材とした鑑賞の題材である。

学習指導要領の内容は、「B鑑賞」(1)鑑賞の事項ア、〔共通事項〕のうち旋律、テクスチュア、形式などを扱う。

主題がそれぞれの声部で表れ、その後、どのように変化しながら曲が発展していくかを聴き取ったり、楽曲の形式を理解し多声音楽の面白さを感じ取ったりする学習を行う。

2 題材について（省略）

3 題材の目標

- (1) 多声音楽に興味・関心をもち鑑賞の学習に主体的に取り組む。
- (2) 旋律、テクスチュア、形式を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ、主体的に解釈したり根拠をもって批評したりするなどして、音楽のよさや美しさを味わって聴く。

4 教材について

「フーガ ト短調」 J. S. バッハ作曲

この教材は、主題が明瞭であり、フーガの主題が他の声部へ移り変わっていく様子についても明確で聴き取りやすい。

また、楽曲が短く約4分程度であるため1時間の授業の中で何度も鑑賞することができる。

＜音源の選択について＞

鑑賞の音源の選択については、様々な演奏の音源があるため、それらの中から、演奏の速さであったり、楽器の音色、表現の仕方など、指導する内容によりあったものや聴き取りやすいものなどを選ぶ必要がある。

5 学習指導要領の指導事項と〔共通事項〕ア・イの関連及び具体的な学習活動

指導事項	鑑賞ア 音楽を形づくっている要素や構造と曲想との関わりを理解して聴き、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと。	
〔共通事項〕ア	旋律	テクスチュア 形式
イ	調	
具体的な学習活動	<ul style="list-style-type: none"> ・主題の旋律・調を感じ取り鑑賞する。 ・主題が現れる回数やそれぞれの音高、調の変化に着目して鑑賞する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・フーガの特徴や曲の構成、声部の役割を聴き取り理解する。 ・主題の繰り返しや声部の移り変わり、声部と声部の関わりに着目して鑑賞する。

6 題材の評価規準

	音楽への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
題材の評価規準	①主題の変化や声部の移り変わりなどの音楽を形づくっている要素や構造と曲想との関わりに関心をもち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。	①主題の変化や声部の移り変わりなど、音楽を形づくっている要素（旋律、テクスチュア、形式）を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、音楽を形づくっている要素や構造と曲想との関わりやフーガの特徴を理解して、解釈したり価値を考えたりし、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わって聴いている。

7 指導と評価の計画（全1時間）

時	○学習内容 主な学習活動	○指導上の留意点 ☆評価規準と評価方法
1	<p>○和声音楽と多声音楽の違いを聴き取る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・導入として「メヌエット ト長調」と「平均律クラヴィーア曲集から第1番ハ長調よりフーガ」を聴き比べ和声音楽と多声音楽の違いを感じ取る。 ・知覚・感受したことをワークシートに記入する。 <p>※導入例としてソプラノ・アルト・テノールの3パートに分かれ「カエルの合唱」と「夢の世界を」を歌わせて和声音楽と多声音楽の比較することもできる。生徒の実態に合わせて選択するとより効果的である。</p> <p>○「フーガト短調」の主題の聴取。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第一声の最初の部分（第二声が出てくる前まで）を旋律に着目して聴く。 ・主題を覚えるためにピアノに合わせて歌う。 <p>○主題の繰り返しによって表現される音楽の面白さを感じ取る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第1部（21小節まで）を主題が繰り返される回数や主の旋律の動きを確認する。 ・聴き取った要素と感じ取った雰囲気や気付いたことをワークシートに記入する <p>（注）旋律とテクスチュアに着目させ、主題が演奏された回数や旋律の特徴、音高の変化を知覚・感受させる場面。</p> <p>○第2部から最後までをオーケストラに編曲された演奏で鑑賞する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主題の繰り返しや声部の移り変わり、主題が演奏されているときに他の声部がどのような旋律を演奏しているかなど、主題との関わりを意識して聴く。 <p>○パイプオルガンによる多声音楽のよさや美しさを味わいながら、曲を通して聴く。</p>	<p>○旋律に着目させて聴かせ、和声音楽と多声音楽の違いを知覚・感受させる。</p> <p>【発問】「主題と他の声部とのかかわりに着目して、二つの曲の違いを聴き取ってください」</p> <p>（生徒から引き出したい意見の例）</p> <p>「1曲目は、聴いたことのある旋律が何回か繰り返されていて旋律に対して和音がついていたが、2曲目は、同じような旋律が何回も追いかけるようになってきた。」</p> <p>「最初の曲は、決まった声部が主旋律を演奏しているが、次の曲は、輪唱のように同じ旋律が途中から他の声部でも重なるように演奏されていた。」</p> <p>○旋律に着目させて聴かせる。</p> <p>○冒頭部分のソーレーシーラの付点のリズムを知覚・感受させる。</p> <p>○何回か聴かせ、主題が繰り返されていることを確認しながら聴かせる。</p> <p>○主題が、他の声部に移り変わって繰り返されるごとに、音高が変わっていくことに気付かせる。</p> <p>【発問】「主題が何回繰り返されましたか」「繰り返された主題について気付いたこと、感じたことはありますか」</p> <p>☆主体的に鑑賞する学習に取り組み、主題が繰り返される回数や旋律の特徴、主題の音高を知覚し感じ取った特質や雰囲気を言葉で表現しようとしている。</p> <p>（関① ワークシート 活動観察）</p> <p>○四つの声部が重なって楽曲が構成されていることと休みになる声部があることも理解させる。</p> <p>○拡大譜を提示するが、生徒にも楽譜を配付し四つの声部の主題をマーカーで塗り、確認させる。</p> <p>○オーケストラのいろいろな楽器によって主題が演奏されることで、パイプオルガンでは聴き取りにくい声部の関わりなどを知覚・感受させる。</p> <p>【発問】「主題が演奏されているときの、他の声部の旋律に気を付けて聴きましょう。」</p> <p>○旋律・テクスチュア形式等の音楽を形づくっている要素や構造と曲想との関連に着目させながら楽曲全体を聴か</p>

- ・主題の繰り返しや声部と声部の関わりなどに着目し、多声音楽の面白さを味わいながら聴く。
- ・紹介文をワークシートに記入する。

フーガについて学習してきたことを基に、「自分が気に入ったところなど、ぜひ他の人に紹介したいこと」を紹介文にまとめさせる場面。
 <生徒のワークシート記入例>を参照

- せる。
- 「自分が気に入ったところなど、ぜひ他の人に紹介したいこと」を紹介文にまとめ、ワークシートに書かせる。その際に、旋律・多声音楽（和声音楽）・主題・声部・フーガのうちから少なくとも三つの言葉を用いて書かせる。
- ☆パイプオルガンとオーケストラの演奏から音楽を形づくっている要素や構造と曲想との関わりやフーガの特徴を理解し、主体的に解釈したり根拠をもって批評したりするなどして、音楽のよさや美しさを味わって聴いている。
 (鑑① ワークシート 活動観察)

8 実践に当たって

(1) 知覚・感受に関する指導の工夫

授業の導入で、和声音楽と多声音楽の比較鑑賞を行い、違いを感じ取らせ、「フーガ」という多声音楽の特徴を思考・判断させた。「フーガ」に興味・関心をもたせるために、主題が何度も繰り返されること、四つの声部からできていること、転調していること、休んでいる声部もあることを、しっかりと理解させた上でフーガ（多声音楽）の面白さを味わわせるように工夫することが大切である。

始めに主題を覚えさせ、主題が何回現れたか数え、楽曲に親しませた。次々と現れる主題を聴き取れるようにして、それぞれの声部に現れる主題の音の高さや調の違いを生徒に考えさせながら聴かせた。また、パイプオルガンの独奏とオーケストラに編曲されたものを比較して聴かせることにより、主題の声部の移り変わりや各声部の役割や声部間のかかわりなど、オーケストラの楽器の様々な音色を手がかりにして、旋律をより聴き取りやすい状況で、楽曲の形式や多声音楽の面白さを味わわせた。

(2) 言語活動との関連

楽曲の形式を理解し、フーガの面白さや楽曲の素晴らしさを味わうと共に、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連がどのようになっているか知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じし、それを自分なりに言葉で言い表したり書き表したりする主体的な活動によって、「フーガ ト短調」をより深く理解し味わうことができると考える。

そのために、まず、主題から感じ取ったことを自分の言葉で表現させた。例として「ゆったりした感じではじまりだんだんリズムが細くなっていった」「短調で始まり、少し寂しい感じで、何か語りかけているような感じがした」などである。さらに、声部が移り変わり主題の音高がどのように変わっていき、途中で長調に転調することや主題が演奏している時に、他の声部でどのような動きが聴き取れたかなどに着目させて言葉で書き表させた。

具体的には、パイプオルガンとオーケストラの演奏を比較鑑賞して紹介文を書かせる際に、「主題はどんな感じか」「主題がどのように繰り返されていたか」「主題が演奏されているときに他の声部はどうであったか」「主題が転調したときに感じたこと」「声部が絡み合う部分で感じたこと」「最後に主題が演奏されて曲が終わるときに感じたこと」「この曲の好きなところ」など2曲を比較して聴く視点を提示した。

9 評価について

- パイプオルガンの演奏で全曲を通して鑑賞し、ワークシートに学習したことをもとに「自分が気に入ったところなど、ぜひ他の人に紹介したいこと」を紹介文にまとめさせる場面。(鑑① ワークシート 活動観察)

(1) 評価方法及び「おおむね満足できる」状況 (B) と判断するポイント

ア 主題の繰り返し

主題が何回も繰り返されていることに気付いており、自分の言葉で感じたことを書いている。

イ 声部のかかわり

それぞれの声部の違った旋律が、調和しながら曲が進んでいくことに気付き、自分の言葉で、感じたことを書いている。

(2) 「十分満足できる」状況 (A) と判断するポイント

ア 主題の繰り返し

主題が何回も繰り返されていることに気付いており、自分の言葉で主題の調の変化や音高の変化など、感じたことを書いている。

イ 声部のかかわり

それぞれの声部が違う旋律を演奏していることに気付き、主題以外の声部について、知覚・感受したことを自分の言葉で書いている。

<生徒のワークシート記入例>

- 学習したことを振り返りながら、「フーガ ト短調」の音楽について、「自分が気に入ったところなど、ぜひ他の人に紹介したいこと」を紹介文にまとめ、書きましょう。その際、「この曲を聴いてわかったことや感じ取ったこと」と「その理由」も含めて下さい。また、「その理由」については、旋律・主題・声部・フーガ・多声音楽のうちから少なくとも三つの言葉を用いて下さい。

- 紹介文を書かせることは、「根拠をもって批評する」ことであり、音楽のよさや美しさなどについて、音楽を形づくっている要素や構造などの客観的な理由をあげながら言葉で表すことである。その際、対象となる音楽が、自分にとってどのような価値があるのかを明らかにすることが重要となる。そのためには、「① 音楽を形づくっている要素や構造 ② 特質や雰囲気および曲想 ③ ①と②との関わり ④ 気に入ったところ、他者に紹介したいところなど自分にとってどのような価値があるのか」といった評価」の内容を含めて、自分なりに批評をすることができるよう指導することが大切である。

例 ・この曲は、フーガという形式で作曲されていて、主題が何回も繰り返されています。四つの声部できている、それぞれの声部の主題が繰り返されるたびに高さが変わり、だんだん低くなっていきます。私は、四つ目の声部がとても低い音で演奏され、落ち着いていてどっしりとした感じがするのでとても好きです。私がすごいと思ったことは、次の主題が出てきた時に、前に演奏していた主題が細かい音に変わっていき、主題とぜんぜん違うのに、とてもきれいに重なって聞こえてくることです。また、すごく低い音がずうっとのびているところもあり、主題と低音の重なりがよかったです。いくつもの旋律が重なって一つの曲になっている多声音楽とパイプオルガンの低い音の響きがとても気に入りました。ぜひ聴いてみてください。

※ 下線の部分は「十分満足できる」状況 (A) と判断するポイント

事例5 我が国の伝統文化に関する指導の事例（第3学年）

1 題材名 我が国の伝統的な歌唱に親しもう

※本事例は、歌舞伎「勧進帳」の長唄（三世 並木五瓶作詞／四世 杵屋六三郎作曲）を教材とし、表現（歌唱）と鑑賞の活動を関連付けた題材である。学習指導要領の内容は、「A表現」(1)歌唱の事項イ、「B鑑賞」(1)鑑賞の事項ア、イ、〔共通事項〕のうち、音色、リズム、旋律などを扱う。

長唄を唄うことによって、長唄にふさわしい発声や唄い方の特徴、言葉の特性を考え、音楽表現の工夫をして唄う。また、歌舞伎の登場人物の心情を理解し、場面にあった発声や唄い方を表現させることにより、歌舞伎における長唄の特徴や役割を関連付けながら、深く味わわせる。

2 題材について（省略）

3 題材の目標

- (1) 長唄の特徴や歌舞伎に関心をもち、学習活動に主体的に取り組む。
- (2) 長唄の発声や唄い方の特徴、言葉の特性を理解してそれらを生かし、音楽表現を工夫する。
- (3) 長唄にふさわしい発声、言葉の発音、身体の使い方などの技能を身に付けて唄う。
- (4) 長唄の特徴や役割を歌舞伎の物語や演出などと関連付けて理解し、歌舞伎音楽のよさや美しさを味わって聴く。

4 教材について

長唄「勧進帳」歌舞伎「勧進帳」三世 並木五瓶 作詞 / 四世 杵屋六三郎 作曲
歌舞伎「勧進帳」は源義経や武蔵坊弁慶などが登場する歌舞伎として、その物語は生徒にとって馴染みやすいものである。この歌舞伎を背景として、用いられている長唄を実際に唄う体験を通して長唄の音楽的な特徴を感じ取らせるとともに、伝統芸能としての歌舞伎を味わわせたいと考え選択した。

- (1) 長唄①「旅の衣は篠かけの露けき袖やしおるらん」の部分
謡いガカリの部分で、発声と言葉の特徴を主に聴き取り、最初に扱うのに適していると考え選曲した。
- (2) 長唄②「これやこの～海津の浦に着きにけり」の部分
安宅の関所に荷物持ちに変装した義経が、山伏姿の弁慶と4人の家来を従えて到着する場面の音楽。生徒が堂々と豪快に声を出して唄いやすいと考え、選曲した。
- (3) 長唄③「ついに泣かぬ弁慶も一期の涙ぞ殊勝なる 判官御手を取り給い」の部分
勧進帳の「クドキ」の部分。歌舞伎での場面の様子や弁慶の気持ちを理解して、その気持ちを表現するにはどのように唄えばよいかを考えさせる曲として適している。

5 学習指導要領の指導事項と〔共通事項〕ア・イの関連及び具体的な学習活動

指導事項	歌唱イ 曲種に応じた発声や言葉の特性を理解して、それらを生かして歌うこと。 鑑賞ア 音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して聴き、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと。 鑑賞イ 音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて理解して、鑑賞すること。
〔共通事項〕ア	音色
イ	リズム 拍 拍子 簡
具体的な学習活動	・長唄に合った発声と基本的な姿勢に気を付けて歌唱をする。 ・三味線の音色を感じ取り、長唄の歌唱をする。 ・長唄や歌舞伎音楽の特徴的な拍や拍子を感じ取り、表現する。 ・長唄を唄ったり、鑑賞する活動を通して、長唄の間を味わう。

6 題材の評価規準

	音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能	鑑賞の能力
題材の評価規準	①長唄にふさわしい声や言葉の特性に関心をもち、それらを生かして唄う学習に主体的に取り組もうとしている。 (歌唱) ②長唄の音色、リズム、旋律と曲想との関わり、歌舞伎の中での長唄の役割と特徴、物語の演出などとの関連に関心をもち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。 (鑑賞)	①長唄の音色、リズム旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じる。 ②感受しながら、長唄にふさわしい声や言葉の特性を理解して、それらを生かした音楽表現を工夫し、どのように唄うかについて思いや意図をもっている。	①長唄の発声や言葉の発音、身体の使い方などの技能を身に付けて唄っている。 ②長唄にふさわしい声や言葉の特性を生かした音楽表現をするために必要な、発声、言葉の発音、身体の使い方などの技能を身に付けて唄っている。	①長唄の音色、リズム、旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じるしながら、音楽を形づくっている要素や構造と曲想との関わりを理解するとともに、長唄の特徴や役割を歌舞伎の物語や演出などと関連付けて理解し、根拠をもって批評して、歌舞伎音楽のよさや美しさを味わって聴いている。
1時	①			
2時		①	①	
3時		②	②	
4時	②			①

7 指導と評価の計画（全4時間）

時	○学習内容 ・主な学習活動	○指導上の留意点 ☆評価規準と評価方法
＜第1次＞ 長唄に親しもう		
1	○歌舞伎における長唄の役割について学習する。 ・歌舞伎「勧進帳」の概要について知る。 ・長唄①の範唱を聴き、発声に関して感じたこと、音の高低や産字、節尻などに着目してワークシートに書き込み、発表する。 ・長唄①の部分の範唱を聴き、範唱に合わせて唄う。	○歌舞伎に関しての基本内容を理解させる。 ○歌舞伎「勧進帳」のストーリーを分かりやすく解説し、理解させる。 ○生徒に知覚・感受させたことを基に、どのように唄えば長唄らしくなるのかを考えさせる。 ○声の音色・声質に関して気付いたことを発表させる。 ○「旅の衣は篠懸の～」の部分の発声と言葉の特徴に気を付けて唄わせる。 ☆長唄の発声や唄い方の特徴に興味・関心をもって意欲的に取り組んでいる。 (関① ワークシート 活動観察)
○長唄の声の特徴を生徒に知覚・感受させ、どのように唄えばよいか思考・判断させる大切な場面。 ○思考力・判断力・表現力等の学習活動の分類：①、⑤、⑥ ※9 評価について 参照		
2	・長唄②の範唱を聴き、発声に関して感じたこと、音の高低や産字、節尻などに着目してワークシートに書き込む。 ○範唱を鑑賞し、発声や唄い方、姿勢をどのように	○拍に沿って歌詞を書いたワークシートに、知覚・感受したことを記入させる。 ○範唱を聴いてどのような唄い方で唄えばよいかを考えさせる。

<p>すればよいのかを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> 音声から気付いたことをワークシートに記入する。 映像を視聴して気付いたことをワークシートに記入する。 <p>・長唄②を、範唱に合わせて唄う。</p> <p>・長唄③を、音の高低や産字、節尻などに着目してワークシートに書き込む。</p> <p>・長唄③を前時の学習内容を生かして、範唱に合わせて唄う。</p> <p>3 ○長唄③の背景となる弁慶と義経の心情を考え理解し、表現を工夫して唄う。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「声と音色の変化」「唄の旋律」「唄や三味線のリズム」に着目して、長唄③を聴く。 弁慶と義経の心情をどのように長唄で表現すればよいかを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 音のみの演奏と映像での演奏の2種類を提示し、自分たちの演奏につながるようにさせる。 ☆長唄の発声や唄い方の特徴を感じ取り、発声や言葉の特性を生かして唄うための工夫をしている。(創① ワークシート 活動観察) ○考えたことを生かして唄えるようにさせる。 ☆長唄の発声や言葉の特性を生かして唄う技能を身に付けている。(技① 活動観察) ○前時と同様にワークシートに気付いたことを記入させる。 ○前時の復習をさせ、長唄の発声や唄い方の特徴、姿勢等を確認しながら唄わせる。 ○歌舞伎での場面との関連を分かりやすく話し、弁慶と義経の心情を考え理解させる。 ○唄と三味線の関連について着目して聴かせる。 ○グループごとに、場面にふさわしい長唄の表現を考え、試行錯誤しながら練習させる。 ☆長唄にふさわしい声や言葉の特性を理解して、それらを生かした音楽表現を工夫し、どのように唄うかについて思いや意図をもっている。(創② ワークシート・活動観察)
<p>○本題材の核となる部分。長唄の歌唱に関して、登場人物の心情を考えながら音楽表現を工夫して唄うとともに、歌舞伎のよさや美しさを味わう鑑賞活動のために学習内容を深めさせたい。</p> <p>○思考力・判断力・表現力等の学習活動の分類：①、⑤、⑥</p>	
<p>・長唄の発表をする。</p> <p>・模範演奏を鑑賞する。</p>	<p>○場面にふさわしい表現をするために工夫した点を説明し、いくつかのグループに発表をさせる。</p> <p>☆長唄の歌詞や使われる場面にふさわしい表現で唄う技能を身に付けている。(技② 活動観察)</p> <p>○自分たちとの演奏と比較させ、歌舞伎の中での長唄の役割と効果、役者の演技と音楽の一体感に注目して鑑賞させる。</p>
<p><第2次> 長唄の役割と効果を理解して、歌舞伎を味わおう</p>	
<p>4 ○長唄の役割と効果を理解して、歌舞伎を味わう。</p> <ul style="list-style-type: none"> 歌舞伎「勅進帳」を視聴する。 歌舞伎「勅進帳」を自分の視点で根拠をもって批評する。長唄について、楽器や囃子について、舞について、総合芸術について日本の伝統芸能としての歌舞伎について、などから、自分で選んで批評する。 <p>・批評文を発表する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 場面を区切って鑑賞させ、長唄の役割や効果を理解させる。 ○長唄を中心としての視点とそれ以外の気付いたことや思ったことを客観的に根拠をもって批評させ、自分にとってどのような価値があるのか考えさせる。 ☆長唄の特徴と曲想との関わり、歌舞伎の中での長唄の役割と、物語の演出などとの関連に関心をもち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。(関② ワークシート 活動観察) ☆長唄の特徴や役割と歌舞伎との関わりを理解して聴き、よさや美しさを味わっている。(鑑① ワークシート 活動観察) ○互いに発表し合い、意見を共有する。

8 実践に当たって

(1) 我が国の伝統的な歌唱の授業を実践するに当たって

ア 我が国の伝統的な歌唱とは

我が国の各地域で歌い継がれている仕事歌や盆踊歌などの民謡、歌舞伎における長唄、能楽における謡曲、文楽における義太夫節、三味線や箏などの楽器を伴う地歌・箏曲など、我が国や郷土の伝統音楽における歌唱を意味している。

イ 教材の選択について

教材の選択に当たっては、これらの伝統的な歌唱のうち、地域や学校、生徒の実態を考慮して、伝統的な声の特徴を感じ取れるものを選択していくことになる。伝統的な声の特徴を感じ取るためには、例えば発声の仕方や声の音色、コブシ、節回し、母音を伸ばす産字などに着目することが考えられる。生徒が実際に唄う体験を通して、伝統的な声の特徴を感じ取ることができるよう、地域や学校、生徒の実態を十分に考慮して適切な教材を選択することが重要である。

また、生徒にとって第1学年の段階から我が国の伝統的な歌唱に親しむことが重要であり、3学年を通して計画的・系統的に我が国の伝統的な歌唱に関しての題材設定をすることが肝要である。例えば、第1学年では「民謡やお囃子」のように生徒にとって身近なものから学習し、第2学年で「箏」を弾きながら簡単な唄を唄い、まとめとして第3学年で「総合芸術と長唄」を学習するような3年間を見通した題材設定を工夫するのである。そのような教師の工夫によって、生徒が無理なく効果的に学習をすることができるようになる。

ウ 指導に当たって

声の音色や装飾的な節回しなどの旋律の特徴に焦点を当てて、比較して聴いたり実際に声を出したりして、これらの特徴を生徒一人一人が感じ取り、伝統的な歌唱における声の特徴に興味・関心をもつことができるように工夫することが大切である。

授業の最初の段階では、実際の伝統芸能の現場で行われているように、「お手本を聴いてまねする」という方法

に近い、模範演奏に合わせて真似させる方法で授業を行った。真似するためにはお手本の唄声がどのような音色で唄われているか、そうした音色で唄うには口の中の形をどのようにしているのか、などを生徒に考えさせながら授業を進めることが大切である。これは「教えられて習得するのではなく、お手本から気付いたことを身に付ける」という日本の伝統芸能に共通する方法でもある。

授業では、最初は恥ずかしがらずに模範演奏のまねをして大きな声で唄わせることから始めた。「正座して唄う」とことや「独特の声の音色を表現するためにはどうすればよいのだろうか」と生徒たちも最初は戸惑っていたが、学習す

るにつれてお腹から声を出すことが快感になり、練習を重ねるごとに長唄らしい演奏に仕上がっていった。具体的な練習方法は普通の合唱の取り組み方と同じで、生徒を賞賛することを評価の基本とし、考えながら唄うことを何度も繰り返していくうちに、生徒たちは長唄の魅力に引き込まれていった。

(2) 伝統的な歌唱の具体的な特徴

長唄の声の特徴や言葉の特性を生徒に十分に知覚・感受させ、知覚・感受し、思考・判断したことをもとに授業を展開した。そして、以下のような具体的な体の使い方や唄い方に気付かせ、実際に唄う学習活動につなげていく工夫をした。

ア 体の使い方

- ・息をたくさん吸う。 ・体を使ってお腹から声を張り上げるように唄う。
- ・のどには力を入れずに唄う（のどを開く）。 ・背筋を伸ばし、目を見開いて唄う。

イ 唄い方

- ・声を前に出す。 ・一音一音はっきりと発音し、地を這うように唄う。
- ・母音を強調してしっかりと伸ばして大切に唄う。（産字を大切に）
- ・音を切るときに、余韻を残さない。
- ・前の言葉の口の形で次の言葉を唄わない。（言葉を必ず言い直す）

(3) 言語活動との関連

本題材では、「長唄の発声と唄い方の特徴を感じ取り、曲にふさわしい表現を工夫して唄うこと」と「歌舞伎における長唄の役割と効果を理解して味わうこと」を関連させて、最終的に「自分はこのように感じ、こう思ったので、このように考える。だから、私にとってこの音楽はこのような意味がある。」というような「日本の伝統音楽のよさや美しさを味わうことによって、それが自分にとって価値がある」ということにまで言及する言葉を引き出したい。それが、自分の意見を客観的に捉えることになり、より一層音楽に主体的に関わる態度を身につけ、深く味わうことができるようになる。本題材では知覚・感受したことをもとに、長唄にふさわしい表現を思考・判断し、実際に唄う（表現することや体験を通して音楽を理解することにより、「長唄」と「歌舞伎」をより深く理解し味わうことができる）と考える。

9 評価について

- 長唄①の範唄を聴き、発声に関して感じたこと、音の高低や産字、節尻などに着目してワークシートに書き込み、発表する場面。
- 長唄①の部分の範唄を聴き、範唄に合わせて唄う場面。 (関① ワークシート 活動観察)

(1) 評価方法及び「おおむね満足できる」状況 (B) と判断するポイント

ア ワークシートについて

- 演奏を聴いて、声の音色と言葉の唄い方の特徴を知覚・感受しどのように唄えばよいか思考・判断する場面
 - ・声の音色と言葉の唄い方について、長唄の特徴に気付き、自分なりに感じたことを書いている。
 - ・知覚・感受したことを基に、どのようにすれば長唄らしい声が出るのかを試行錯誤して唄い方を試しながら、思考・判断している。
- 演奏を試聴して、唄い方（姿勢・身体の使い方・口の開け方等）を考える場面
 - ・映像を見て、長唄の唄い方の特徴に気付いて書いている。
 - ・映像を見て気付いたことを基に、どのように唄えばよいかを書いている。
- 音程の高低や旋律の動きを歌詞の上に線で表す場面
 - ・演奏を聴き、歌詞の上に音程の高低や旋律の動きを書いている。

イ 活動観察について

- 発音と言葉の発音に気を付けて歌う場面。
 - ・長唄にふさわしい声や言葉の特性に関心をもち、それらを生かして唄おうとしている。
 - ・知覚・感受したことを基に、どのようにすれば長唄らしい声が出るのかを試行錯誤して唄い方を試している。
 - ・他の人の意見や考えを聴き、自分の考えを更によいものにし深めようとしている。

(2) 「十分満足できる」状況 (A) の例

- ワークシートに自分の感じたことや考えを記入し、それらを唄う活動に生かし、主体的に唄おうとしている。

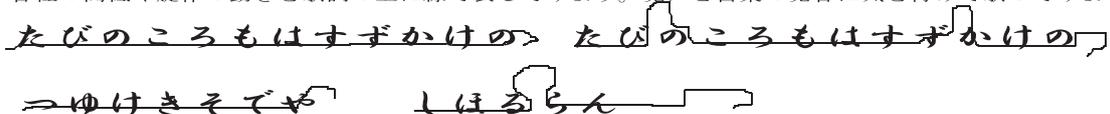
- 1 演奏を聴いて、声の音色と言葉の唄い方の特徴を感じ取ろう。
どのように唄えば、演奏のような声が出るのかを考えよう。

	感じた事	どのように歌えばよいか
声の音色 (声質)	・深い ・力強い ・太い声 ・鼻にかかっているような声	・声を前に出す。 ・地を這うようにお腹の下から歌う感じ。
言葉の唄い方 の特徴	・言葉の最後に余韻がない。 ・一つ一つの言葉がはっきりしている。 ・母音が強く発音されている。	・音を切るときに余韻を残さない。 ・一音一音はっきりと発音する。 ・母音を強調してしっかりと伸ばして唄う。

- 2 唄っている演奏を視聴して、唄い方（姿勢・身体の使い方・口の開け方等）を考えよう。

- ・正座で唄う ・背筋を伸ばし、目を見開いて唄う ・息をたくさん吸う
- ・身体全体を使って、お腹から声を張り上げるようにして唄う。
- ・前の言葉の口の形で次の言葉を言わない。（言葉を必ず言い直す）

- 3 音程の高低や旋律の動きを歌詞の上に線で表してみよう。発声と言葉の発音に気を付けて歌ってみよう。



(3) 指導の手立ての工夫例

長唄を聴く際は、感じ取ったことや考えたことを自由に発言できるような雰囲気をつくるとともに、様々な発言の中から、声の音色や唄い方に関わるようなものを教師が取り上げて、整理することによってそれらを主体的に知覚・感受できるようにする。

事例6 国際理解教育と道徳的な価値との関連を図った事例（第3学年）

1 題材名 我が国や郷土の伝統音楽 諸外国の様々な音楽に親しもう ～国際理解教育との関連を図りながら～

※本事例では、広い視野から捉えて伝統的な日本の音楽である雅楽に触れることにより、今なお伝承されている優れた日本の音楽文化に親しみ、尊重し、更に新しい文化の創造に貢献できる態度の育成をねらいとしている。

2 題材について（略）

3 題材の目標

- (1) 我が国や郷土の伝統音楽、諸外国の楽器や音楽に関心を高め、主体的に取り組む。
- (2) 雅楽の楽器の特徴や役割を我が国独特の音楽の表現と関連させて理解し、我が国の伝統音楽のよさや美しさを味わって聴く。

4 教材について 雅楽「越天楽」（管弦） 「越天楽」（オーケストラによる編曲） 雅楽「表正萬方之曲」

「越天楽」では楽器の仕組み、奏法、音色、役割などについて理解し、それぞれの楽器の音色を意識して聴き取ることにより、旋律的特徴、リズム的特徴、音の重なりなど我が国独特の音楽の表現に気づかせることができる。「表正萬方之曲」との比較聴取では、雅楽が中国や朝鮮半島などアジアの音楽と互いに影響を及ぼし合っていることを理解させたい。雅楽を民族音楽の指導の手がかりとし、それに関してアジアの音楽に触れることの意義も大きいと言える。

「管弦による越天楽」（オーケストラ）との比較聴取では、西欧音楽と比べて楽曲全体の響きや雰囲気、楽器の音色など、雅楽の音楽の特徴を感じ取らせ音楽の多様性に気づかせたい。

5 学習指導要領の指導事項と〔共通事項〕ア・イの関連及び具体的な学習活動

指導事項	鑑賞ア 音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して聴き、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと。 鑑賞ウ 我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴から音楽の多様性を理解して、鑑賞すること。
〔共通事項〕ア イ	音色 リズム 拍子 間 序破急 テクスチャ 和音
具体的な学習活動	・模範演奏を聴き、様々な楽器の音色を感じ取る。 ・越天楽を鑑賞し、雅楽の楽器の音色を感じ取っている。 ・日本独特の特徴を捉え、拍子のずれ、速度の緩急の変化や間を感じ取っている。 ・旋律・和音・リズムなどが、曲全体の中で相互に関連し、影響し合っていることを感じ取りながら聴いている。

6 題材の評価規準

	音楽への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
題材の評価規準	①我が国や郷土の伝統音楽の楽器や音楽、関連する諸外国に伝わる楽器や音楽に興味・関心を高め、主体的に学習に取り組もうとしている。 ②雅楽の楽器の音色やリズム、テクスチャ、構造や曲想とのかかわり、雅楽の中での楽器の特徴や役割、我が国独特の音楽の表現に関心をもち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。	①我が国や郷土の伝統音楽の楽器や、諸外国の楽器の構造や奏法による音色、リズム、役割の違いを知覚し、特徴ある音色や特質、雰囲気を感受しながら音楽の多様性を理解して聴いている。 ②音色、リズム、テクスチャや構造と曲想との関わりを理解すると共に、雅楽全体の響きを味わい、楽器の特徴や役割を理解しながら我が国独特の音楽の表現と関連させ、根拠をもって批評し、雅楽の音楽のよさや美しさを味わって聴いている。
1時	①	
2時		①
3時	②	②

7 指導と評価の計画（全3時間）

時	○学習内容 ・主な学習活動	○指導上の留意点 ☆評価規準
	〈第1次〉 様々な楽器に触れ、日本やアジア、南米の楽器や音楽について理解を深めよう。	
1	○楽器についての基礎的な事項について学習する。 ・ゲストティーチャーの模範演奏を聞く。 ○ゲストティーチャーから日本やアジア、南米の楽器や奏法についての説明を聞き、楽器の音色を感じ取る。 ・楽器の名前と楽器の由来について考える。 ・楽器の構造や奏法と音色との関連について考える。 ・楽器や楽器の音色が表現するもの、意味するものについて想像する。 ○グループごとに移動し、個人で楽器を演奏し音を感じ取る。 ・日本やアジア、南米の楽器や音楽について分かったことや、実際に音を出して感じたことを〈ワークシート1〉にまとめる。	○丁寧な楽器の取り扱い方や演奏のするときの注意点について学習し、身に付けさせる。 ☆日本やアジア、南米の音楽に関連する音楽や楽器に興味・関心をもち意欲的に聴こうとしている。 (関① 表情・活動観察) ○できるだけ多くの多様な楽器を用意する。(箏、龍笛、篠笛、太鼓、蛇遣いの笛、ケーナ 他) ☆楽器の構造・奏法・音色・役割・楽器の歴史的な変容、特質や雰囲気などについて理解できる。(鑑① 発言内容) ○自然界(天・地・空・水・空間・風)や儀式との関連、自然素材利用など、楽器が生活や信仰から生まれてきているという表れであることに気付かせる。 ○楽器の持ち方、穴の押さえ方、息づかい、角度、姿勢など奏法の違う楽器で試行錯誤させ、表現の違いを体感させる。 ○一人一人が積極的に楽器に触れ、多くの楽器の奏法を試みるように助言する。 ○楽器や音楽について学習し、知覚、感受したことについて〈ワークシート1〉に書き込ませる。

〈ワークシート1〉・あなたが一番気に入った楽器は？

インドの笛
使いの笛
コブラの笛も言えます。

サポーニヤと
マルタ

〈ワークシート1〉・音を出してみた感想は？

吹いてみると音は大きくておもしろい音がしました。
みづはちの像を作るみづろうで、ひょうたんのようものをくっつけたものでした。
自然な風の本音がよく入りました。

〈第2次〉日本とアジア、西欧の音楽や楽器の音色を聴き、共通する点や音楽の多様な表現を感じ取る。

- 2 ○日本とアジアの音楽や楽器の音色や響きを聴き取る。
・雅楽「越天楽」(管弦)、「表正萬方之曲」の部分を見聴する。
・共通点や相違点、多様な表現方法について話し合い発表させ〈ワークシート2〉に書き込む。
- 日本の雅楽、韓国、諸外国には多くの民族が存在し、それと共に様々な形の楽器や音楽が存在することを理解させる。
☆日本の雅楽、アジアの民族音楽に用いられている楽器の音色や響きを知覚、感受し、奏法も捉えながら楽器についての共通点、相違点を把握し音楽の多様性を理解しながら聴いている。(鑑① 発言内容・ワークシート2)

○日本の音楽や楽器、アジアの音楽や楽器の音色を聴き、共通点や相違点を知覚・感受し、それらの特徴及び感じ取った音色や響きが、どのように楽器の形や奏法と関わっているのかを思考・判断させる場面。
○聴き取った音楽や楽器の音色や響きの特徴を確認し、それを手がかりに学習したことを意識しながら次の比較聴取や鑑賞に臨ませたい。
○思考力・判断力・表現力等の分類：①、④、⑥ ※ワークシート2より 参照

- ・楽器の種類や音色、構造、奏法の共通点、相違点を把握させ、どうしてなのかその理由を考える。
・それぞれの楽器や、違う奏法による多様な音楽の表現は、自然界の何を表しているのか想像する。

〈ワークシート2〉
・日本の楽器とアジアの楽器の音色や音楽を比べてわかったこと、感じたことをまとめよう。

日本には、いろいろな楽器があるけど、ほとんどが竹や木など自然のものを使ったものが多かった。アジアの楽器としても音や形が似ているものがありました。音はとても高い、低いのははっきりしていると思いました。

- 違う意見や感じ方がある場合には、自分と違う感じ方に注目させ、再度聴くときの新たな視点へと繋げさせるよう助言する。(言語活動充実のためのポイント 言語活動の活発化のために、小グループ編成で互いの意見をメモさせる)
○各楽器の構造や奏法の共通点や相違点を把握させるため、世界地図や楽器の写真など資料を参考にさせる。
○楽器はインドから中国、日本へとシルクロードや海を越えて伝来し、音楽文化も共に伝来したことに気付かせる。
○日本の楽器と西欧の楽器の演奏を比較聴取させる。
○比較する観点を明確にする。(楽器の形・音色・響き・和音構成・雰囲気・演奏形態・指揮者の存在)
○雅楽の合奏も三管両絃三鼓(管楽器・弦楽器・打楽器)がそろったオーケストラの演奏と同じ構成であることを知らせる。
○雅楽の楽器や音楽、西欧の楽器や音楽に興味・関心を高め主体的に学習に取り組ませる。

《発問》日本の楽器と比べ、楽器の形、音色、全体の響きはどんな感じがするのだろうか。指揮者がいないのはどうしてだろうか。

- ・雅楽「越天楽」(管弦)、「管弦楽による越天楽」(オーケストラ)の最初の部分を聴き取る。
・日本独特の速度、和音を聴き取る。

〈第3次〉我が国の伝統的な音楽に対する興味・関心を高め、音楽のよさや美しさを味わう。

- 3 ○雅楽「越天楽」と既習曲「越天楽今様」の関連について理解し、音楽のよさや美しさを味わう。
○雅楽団による雅楽の楽器や音色、奏法、役割についての説明を聞く。
・雅楽団による雅楽「越天楽」(管弦)の演奏を鑑賞し、既習したアジアの楽器の音色を聴き取る。
- 既習曲「越天楽今様」の旋律が「越天楽」を基に作られていることに気付かせ、ゆったりとした速度が日本の音楽の雰囲気に繋がっていることを振り返らせる。(※小・中連携)
○雅楽の楽器名に、意味を表す見慣れない難しい漢字が使われていることも特徴の一つであることを知らせる。
○楽器の仕組み、奏法、音色、役割などについて理解させる。
○拍子、間、緩急の変化、旋律、和音の関わりを曲全体の中で把握させる。
☆音色、リズム、テクスチャ、構造と曲想の関わり、楽器の特徴と役割、我が国独特の音楽表現に関心をもち、主体的に取り組もうとしている。(関② 活動観察)
○西欧音楽、アジアの音楽、諸外国の音楽と比較し、音楽の多様性に気付きながら鑑賞できるようにさせる。
○旋律的特徴(音型のずれ)、リズム的特徴(かたらいのリズム)、音の重なりなどに気付かせる。



【秩父神社雅楽団による演奏】

《発問》楽器の入り方がバラバラなのはどうしてだろうか。拍子をそろえて演奏しているように聴こえないのはどうしてだろうか。

- ・雅楽「越天楽」(管弦)を、我が国の伝統音楽の特徴をふまえ、どんな価値を感じたのかを含めて批評する。

- 自分が感じたことを分かりやすくまとめた文章を書かせる
☆音色、リズム、テクスチャや構造と曲想との関わり、楽器の特徴や役割を理解し、我が国独特の音楽のよさや美しさを味わっている。(鑑② 批評文)
○他の生徒の考えや感じ方を知ることにより、様々な音楽的価値があることに気付かせ、新たな視点をもたせる。

○本題材の中心部分。教師の発問等の工夫により、言語活動が活発に行われるよう意識して取り組ませたい。

○「越天楽」の鑑賞活動を通して、音楽を形作っている様々な要素が生み出す特質や雰囲気を知覚・感受しながら、自分が想像したことや感じ取ったこと、我が国の伝統音楽に対する自分の思いや意図を関連させて批評文を書かせる。我が国の独特の音楽のよさや美しさの価値に気付かせ、批評文の発表や意見交換に生かせるようにさせたい。(言語活動充実のためのポイント 音楽に関する言葉を用いて、自分の考えをまとめさせる。)

○思考力・判断力・表現力等の学習活動の分類：①、④、⑥ ※9 評価について 参照

- ・互いの批評文を発表し、それを基に意見交換をする
- ・相手に曲のよさが伝わるように発表させる。(言語活動充実のためのポイント 互いの意見をしっかりと聞きながら考えさせる。)

8 実践に当たって

(1) 教材の選択と、国際理解教育、小・中の連携との関連とその重要性

国際理解教育に欠かせない日本の文化の理解という点から、積極的に我が国の伝統的な音楽や伝統芸能を取り上げたい。異文化や我が国の伝統的な音楽と異なる音楽について知り、異なる文化や価値観を受容し尊重する態度を育てると共に、日本の伝統的な楽器や歌唱表現の特徴についても理解させ日本の音楽のよさや美しさを感じ取らせたい。

雅楽「越天楽」の学習では、小学校6学年で既習の「越天楽今様」(古謡)を基にして学習を進めた。唱歌で旋律を把握できていたため、鑑賞時の旋律の確認がスムーズであった。レミソラシの音階の確認や、ゆっくりとした速度の把握もしやすく、小・中の連携(系統性)の利点を生かし、学習内容の連続性を配慮して教材を選択した。中学校では更に発展的に諸外国の楽器の音や音楽と比較させ、我が国の伝統的な音楽文化のよさに気付かせながら、雅楽「越天楽」の曲についての根拠ある自分なりの意見や考えをもつことにより、音楽の価値に迫らせたい。諸外国の音楽、アジアの音楽と我が国の音楽との関連を学習するのに適した教材である。

(2) 指導に当たって

我が国や郷土の伝統音楽に対する理解を深めるため、「伝統的な歌唱」や、「和楽器」鑑賞における「我が国や郷土の伝統音楽」など小学校での学習経験を踏まえ、中学校では更に学習を積み重ね実際の体験も取り入れ様々な事柄を感じ取らせたい。本事例ではゲストティーチャーの解説や実技指導を取り入れ、「越天楽今様」との関連ですでに学習した箏・龍笛の他に日本の楽器や諸外国の楽器を新たに加え、広がりや深まりのある学習内容をねらいとした授業を試みた。授業の主体となる教師の意図や指導のねらい、ゲストティーチャーの補助を通じ生徒たちに感じ取ってほしい事柄を明確にし、教師との関わりによって有効性を発揮させたい。地域の方とのふれあいにより文化や伝統を尊重する態度の育成も期待されるが、あくまでも教師主体に授業を進めることが肝要である。和楽器の学習に当たっては、楽器の仕組みや演奏方法、読譜の知識も重要視される。小・中学校の系統性を踏まえた三年間の指導計画の中に計画性・継続性をもって取り入れ、生徒たちの和楽器に対する興味・関心を高められるように工夫したい。広がり高まっていく連続性、発展性を考慮した学習内容により、小・中の関連を重視し日本の伝統音楽の特質やよさを生徒たちに感じさせたい。



【ゲストティーチャーによる楽器指導】

(3) 言語活動との関連について

本題材では、雅楽「越天楽」(管弦)の音色、リズム、テクスチュアや構造と曲想との関わりを感じ取って聴き、自分が理解したことや感じたことを分かりやすくまとめた言葉で文章に表すことにより、自分にとって価値あるものがどんなところであるのかを把握させたい。また、批評文をわかりやすく伝え、意見交換を行うことによって様々な感じ方があることに気付かせ、話し合うことで音や音楽に対する感じ方についての視点を更に広げることができると考えられる。言語活動を充実のためのポイントを意識し、互いに認め合い高め合いながら授業を展開し、「我が国の伝統的な音楽のよさや美しさ」を多面的に味わわせ、古来から現在へと伝わる伝統音楽を新鮮な音楽と捉えて音楽に対する新しい価値や魅力に迫らせたい。それにより、伝統的な日本の音楽や音楽文化を尊重する態度を育てたい。

9 評価について

○雅楽「越天楽」(管弦)を、我が国の伝統音楽の特徴を踏まえ、どんな価値を感じたのかを含めて批評する場面の評価について (鑑② 批評文)

(1) 評価方法及び「おおむね満足できる」状況(B)と判断するポイント

三管両絃三鼓との関わりや旋律的特徴、リズム的特徴、音の重なりなどを知覚し、曲想の変化を感じ取りながら楽曲全体の響きを味わい多くのよさに気付く、批評文に分かりやすく記述している。

(2) 評価方法及び「十分満足できる」状況(A)と判断するポイント

三管両絃三鼓との関わりや旋律的特徴、リズム敵特徴、音の重なりなどを知覚し、曲想の変化を感じ取りながら楽曲全体の響きを味わい多くのよさを発見し、楽曲について解釈と感受したことを具体的なイメージと関わらせて、批評文に根拠ある記述をしている。

「十分満足できる」状況(A)の例 ○批評文より(——)の部分が、評価 A となるポイント)

- ※楽器の配置によって、世界観を表していることが分かった。天と空間、大地を表す楽器の三種類に分けられ、太鼓は地響き、箏は光、龍笛は空飛ぶ空間を表していることも分かった。それぞれの楽器の入り方がバラバラで、拍子を数えるように聞こえないけど、それが雅楽の演奏の仕方でも、自然さを大切に祖先から受け継いだ考えによるものだとわかった。音の重なりも微妙な感じがしたが、これも日本の楽器だから味わえる感覚なのだと思う。
- ※リズムの特徴や、旋律の特徴に気を付けながら聞いた。太鼓や龍笛のリズムの感じは秩父屋台囃子の拍子の感じが似ていて違和感がなかった。旋律は、箏、笙、龍笛の音型のずれを気にしながら聞いたが、ずれているのは日本の音楽の特徴でヘテロフォニーというらしいです。ずれば、自然さをわざと追求しているというのが分かった。静かな曲の中にも、しばらく間があったりだんだん速くなったりするところがあった。間も大切な音楽の一部だと思う。全体的には、穏やかな感じで心が落ち着く感じがした。
- ※雅楽の楽器は、演奏するのが難しそうだった。吹き方や指の動かし方がリズムを刻んでいたが、そのリズムのずれを演奏するのは大変なんだろうなと思った。指揮者もいなくてオーケストラの演奏とはぜんぜん違って、きれいなびったりとした感じはなかったけど、ずれがこの曲の価値で日本らしさなんだと思った。こういう音楽の感じを初めて知ったので、いろいろな音楽を聴く時にこの日本の音楽の特徴や雰囲気を思い出しながら聞きたいし、和楽器も演奏してみたい。

(3) 評価方法及び努力を要する状況(C)と判断される生徒への働きかけ

楽曲の特徴やよさに気付くよう、友達の聴き取った音楽的な価値を意識させて聞くよう促した。自分が感じ取ったことを自分の言葉で表し、それを価値として捉えられるように個人的に指導を行い、批評文を記述させた。